Japanese Association for Tibetan Studies

チベットにおける天部について

北村　太道

はじめに

チベットがインドの天部の神々をどのように受容してきたか，また，チベット密教における天部に関わる修法儀軌などの詳細な研究は，わが国では少ない。

現在，チベット仏教の各派ではそれぞれ独自の天部に関する儀軌次第を擁している。それらの儀軌はインド伝来の天部の称讃（stotra）と成就法（sādhana）を基に，実際に機能するものとして構成されたものであり，プトンの著作に依る儀軌次第など，その殆どは 15 世紀以降に完成されたものである。

今回は就中，毘沙門天と辯才天に限り，現在のチベット仏教の各派で実際に行われている「許可（rjes gnang）」などの伝授体験を通して，その儀軌の構造，及び修法内容とその特徴を明らかにし，かつまたチベットにおける天部の受容形態と現在を紹介したい。さらにこの種の研究の取り扱い方などについて言及してみたい。

1　密教経軌における天部

インドにおける宗教，併びに哲学思想を語るとき天（deva・神）を外してあり得ない。また仏教経典における釈迦成道についても，梵天勧請など何らかの意味で天部が関わっている。また密教において最も重要な曼荼羅の作壇についても必ず地神に借地の許可を得るなど，天部との関わりは特に顕著である。しかし密教経軌の中ではそれら天部[1]は外金剛部として取り扱われ，内なる密教に対して，外と表現される場合がある。そしてまた，ヒンドゥーの神々の処遇は仏・菩薩の僕（しもべ）として，或いは諸仏を称讃し，その御徳を誉め称える存在として登場させるだけでなく，やがては入壇させて金剛名号を授け，自らの威徳はそのままに曼荼羅の一員に加えて行くという特異な方法を採ったのである。

1.1　『大日経』における天部

行タントラ（caryātantra）の代表である『大日経』の「持明禁戒品十五」には「帝釈や梵の諸天，ピシャーチャ，マホーラガ，羅刹などが遠方より来たりて敬礼し，..... マートリカーなど持真言者を見たとき礼拝するであろう」（chi. 大正 18.p.38a, tib. Toh.No.216a-b）と，持真言者（gsang sngags ’dzin pa）に諸天が敬礼する姿が説かれており，また当経の「住心品第一」には「世間の天なる者も真言教法の実践儀軌で諸有情を利益せんとする者は勤勇者と言われる（若諸天世間　真言法教道　如是勤勇者　為利益衆生故）」（chi.T.18.p.4c, tib. Toh.no.494.182a）とあり，

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

善無畏の『大日経疏』は「世天等も悉く是れ毘盧遮那なり。何ぞ浅深の別あらん」(chi.T.39. p.649b) と釈している。すなわち，たとい天部であっても真言教法を実践し衆生利益に勤修する者は毘盧遮那の本誓を担う大勤勇 (mahā-vīra) であることが指摘されているのである。また「世・出世護摩法品第二十七」には，「復次秘密主往昔一時我為菩薩行菩薩行住於梵世　時有梵天問我言大梵我　等欲知火有幾種時我如是答言。所謂大梵天　名我慢自然　次大梵天子　彼簸嚩句 (pāvaka) ....」(chi. 大正 18.p.42c-43a) とあり，世尊毘盧遮那が菩薩 (未現等覚位) であったとき，すなわち梵世にあったときに吾に梵天が火天に幾種あるかと質問したことに対して，梵天の子 pāvaka を初めとし，Yogāntāgi に至るまで四十四天があることを演べたとある。それは『大日経疏』によれば，「外典の浄行の韋陀 (veda) 論の中に火祠の法あり，然も大乗真言にも亦火法あり。然る所以は，一類を摂伏せんが為の故に仏，韋陀の事を以て摂伏す。...(中略)... 自ら本性に梵王となりし時，外の韋陀の法を演べたりと，説きて彼の邪宗の心をして伏せしめ，然して後に此の真言門の正行を説き給ふ」(chi. 大正 39.p.779a) と釈している。それ故に続いて経典には，「我復成菩提　演説十二火　智火最為初　名大因陀羅 (mahendra) ..... 十二火謨賀那 (mohana)」(大正 39.p.43c) とある。すなわち世尊が未だ正覚を成せず曉知する所なき折，如上の四十四種の火法を演べたが，今，正覚を成じたときに真法の十二火を演説したと言う。『大日経疏』は，「所謂火の自性とは即ちこれ如来の一智光なり。仏の説を作し給う所以は，諸の外道を伏して邪正を分別して，彼をして真の護摩を知らしめんと欲す」(大正 39.p.780b) と釈しているように，あくまでも密教の護摩は智火を以て無始以来の無明の薪を焼くにあるとしている。このように火天においても Veda 諸説のものは外護摩とし，密教は内護摩として区別し両者の立場を明瞭にしているが，それらの中にも一つの天部との関わりが見られるのである。

1.2 『初会金剛頂経』における天部

瑜伽タントラ (yogatantra) の代表である『初会金剛頂経』の第二章「降三世品」には，吽迦羅 (hūṃ-kāra) 印を縛して大自在天と鄔摩妃を踏む姿で象徴される。いわゆる金剛忿怒王執金剛が三世の主を降伏することなどが説かれており，今その情況を要約して示せば次のようである。初めに一切の諸天が世尊毘盧遮那に救済と教化を願うと，世尊は教令されて言うに“汝らを救済できない”と。代わりに執金剛に頼めと告げられる。しかし諸天は初め執金剛を信頼しなかった。中でも諸天の長である大自在天は頑に反抗を露にした。ときに執金剛は非常に怒り，忿怒明咒を唱えて大自在天に死の苦しみを嘗めさせた。すると世尊毘盧遮那は，“生命の縁を断じ衰退させるな”と戒められた。ときに執金剛は金剛寿命明咒 (oṃ vajr' āyuḥ　堀内本 Skt § 708) を唱えて大自在天を蘇生させた。にもかかわらず大自在天は“死を忍ぶことはできるが，汝の教令には従わない”と更なる反抗を示したので，金剛忿怒王執金剛は凶暴な心真言 hūṃ を唱え，再度大自在天に悲痛を与え圧迫を加えた。そして再度の遍入明咒を唱えて彼を来させて教訓を与えたのである。ときに仏慈愛真言 (oṃ buddha maitri rakṣa　堀内本 Skt § 729 一切仏慈護心明) を唱えるや否や大自在天の苦しみは消滅し，自らの身体を執金剛に奉献したのである。その事によって大自在天は灰塵で覆われた処 (bhasma-ācchanna) と名づくる悦意仏国土に趣き仏に生まれ変わり，灰塵自在音声如来応供正等覚として住する者となったのである。このような情況の中で大自在天は次のような偈を述べている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

“ああ，一切仏（正等覚）の仏智は無上なり
われは刹那に殺されて涅槃位に安立なさしめ給う”（堀内本 Skt § 733 想定偈）
と。

ときに執金剛は大自在天を生起させ，毘紐（Viṣṇu）などの諸天を呼召して教令を与え，順次に入壇せしめて金剛名号を授け，諸天の各々が具有する威徳はそのままに密教所説の曼荼羅に職位を与えて外金剛部としてその一員に加えたのである。

2　チベットにおける天部

チベット仏教の主流が密教であることは言うまでもないが，チベットが受容した天部についても上述の如く密教思想が把えた天部観を基としている。したがって，主として日本の密教寺院で祀られている毘沙門天，辯才天，大黒天，聖天などが同じようにチベット寺院でも祀られ信仰されているのである。特にリンチェンサンポやアティーシャに由来する西チベットのラダック，ラホール，スピティー，グゲなどの寺院には比較的古い壁画などが残されており，チベットが受容した歴史の古さを物語っている。

所で，それら天部諸尊の中で今回は毘沙門天と辯才天の二天のみを取り挙げ，また実際に現在チベット寺院で修法されているものの調査経験を基にそれらの特徴を明らかにしてみたい。

3　チベットにおける天部の受容と実態

筆者は 1978 年，第一回ラダック調査[(2)]をかわきりに続く 1985 年，第一回密教学問寺ギュメにおいて大黒天の修法を（清風学園 1985），本格的には 1998 年から毘沙門天修法調査など北村（1987; 1999; 2000a; 2000b; 2001a; 2001b; 2002; 2005a; 2005b; 2006; 2008; 2010a; 2010b; 2011a; 2011b:），約 30 年に亘って現地調査を行ってきたが，現在チベット寺院の各派ではそれぞれ独自の天部に関する儀軌次第を擁しており，実際に機能する儀軌次第を完成している。その内容は，インド伝来の天部の称讃（stotra）と成就法（sādhana）を基に，各派において最も重要とする本尊の灌頂や曼荼羅儀軌に伴う諸尊の勧請や供養，及び撥遣に至るまでの阿闍梨と弟子の所作に関わる諸次第も応用されており，その中でもプトンやツォンカパによって著された儀軌次第の依用がその中心をなしている。それ故に，それら儀軌次第の殆どは 15 世紀以降に完成されたものと考えられる。

したがってこの種の研究を進めるにあたっては，修法は別としてもインド伝来の経軌と，各派に伝わる儀軌次第の両者の検証が不可欠であることは言うまでもないが，そのために研究対象とすべき経軌と，実際に入手し得た伝承儀軌を挙げると以下のようになる。

A. 毘沙門天

1）チベット大蔵経に見るインド伝来の経典儀軌

（1）『柳葉宮殿経（Āṭānāṭiya-sūtra）』（Toh.no.33）

（2）『仏説毘沙門天王経』（Toh.no.656=1061）

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

(3)『大毘沙門天成就法』(Toh.no.3730)
(4)『大毘沙門天作業儀軌成就法』(Toh.no.3731)
(5)『毘沙門天儀軌』(Toh.no.3734)
(6)『毘沙門天儀軌』(Toh.no.3735)
(7)『毘沙門天儀軌』(Toh.no.3736)
(8)『満賢成就法』(Toh.no.2666)

2) 宗派伝承儀軌及び全集に収録されるもの

(1)『大毘沙門天能依・財産・無量寿・吉兆請召儀軌成就』[広本] カルサン活仏 (A.D.1887) 著, ゲルク, ニンマ派依用次第
(2)『大毘沙門天奉献供養次第悉地宝庫』[略本] クンディン・ギャムツォー (A.D.1476–1542) 著, ゲルク派依用次第
(3)『三財宝神諸事如意護摩所作理趣』ロサン・ツルティム (A.D. 1714–1810) 著, ゲルク派依用護摩次第
(4)『馬頭秘密集会護法神・具赤鎗毘沙門天の御作業と命根の次第日光索』パドマ・ギャルワン・ジンレ・ドードルツァン著, カギュ・ニンマ両派併修次第
(5)『パボン・カワ全集』巻 6
(6)『プトン全集』プトン (A.D.1289–1364) 著『毘沙門天王の現観 ..... 現望出現』(Toh. no.2162),『秘密主青衣に対する願門による礼讃』(Toh.no.5163),『毘沙門天王の許可灌頂作法』(Toh.no.5164)『毘沙門天画法』(Toh.no.5165),『毘沙門大王礼讃文—』(Toh. no.5166)『毘沙門天に関する相承系譜』(Toh.no.5170 (32))
(7)『ボトン全集』ボトン (A.D. 1376–1452) 著
『毘沙門天王の現観増益』
(8)『黄毘沙門天息災安楽行成就供養作業次第』チェキー・タクパ (A.D.1595–1659) 著
(9)『ギュメ全集』巻 5, ロサン・ゲレを中心とする経軌・成就法の収録
(10)『毘沙門天王法儀』(ウメ書体) その他

B. 辯才天女

1) チベット大蔵経に見られるインド伝来の称讃 (stotra) と成就法 (sādhana)

(1) 辯才天女讃 (Sarasvatī-stotra)
① 『吉祥辯才天女讃』(Toh.no.738)
② 『辯才天女讃』(Toh.no.3704)
③ 『梵天童女辯才天讃成就語光明』(Toh.no.3698)

(2) 辯才天女成就法 (Sarasvatī-sādhana)
① 『金剛大楽辯才天女成就法』(Toh.no.1943)
② 『辯才天女成就法』(Toh.no.3223)
③ 『金剛辯才天成就法』(Toh.no.3224)
④ 『辯才天成就法』(Toh.no.3225)
⑤ 『聖金剛辯才天成就法』(Toh.no.3551)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

⑥『大辯才天成就法』（Toh.no.3552）
⑦『金剛辯才天成就法』（Toh.no.3553）
⑧『金剛辯才天成就法』（Toh.no.3554）
⑨『金剛琵琶辯才天女成就法』（Toh.no.3555）
⑩『金剛辯才天成就法』（Toh.no.3556）
⑪『金剛辯才天成就法』（Toh.no.3557）
⑫『金剛辯才天成就法』（Toh.no.3558）
⑬『辯才天成就法』（Toh.no.3697）
⑭『梵天童女辯才天讃成就光明』（Toh.no.3698）
⑮『吉祥，金剛辯才天女成就法』（Toh.no.3699）
＊ Sādhana-mālā（Bhattacarya）に 8 種，sādhana（161–168）skt あり。

2）各派伝承儀軌
（1）『女尊辯才天成就法と辯才天女成就法許可』（Toh.no.5364）ツォンカパ著
（2）『辯才天女成就法，併に許可』ゲルク派，ギュトゥタザン依用次第
（3）『辯才天女成就法儀軌』（手書き本），ギュメタザン依用本

4　チベットにおける天部の受容と展開

二天のうち，毘沙門天に関しては各派において比較的に信奉され，修法の立場からも完成度の高い儀軌次第を擁しており，現在寺院において年に一度は必ずこの天をお祀りし，寺院の興隆と人民の幸せを祈願して修法をなすのを恒例としている。また寺院の入り口外側に四天王中の一護国神として，更に本殿の入口真上には必ずこの天が描かれており，そしてまた『蔵漢大辞典』にはこの天尊の 27 種の異名[(3)]を載せている程，その人気も高い天部中の一天と言えるのである。

実際の修法については一般民衆のための極簡単な御授け程度のものから，最高は王族や富豪のための立体曼荼羅（図 1）まで建立して行われる豪華なものもあり，特にその立体曼荼羅は各層に納入される薬物や九種宝石などの種類の多さ，またそのために護摩を修する事なども含めて日本の比ではない充実した内容を有っている。またこの立体曼荼羅の一層基坦には毘沙門天（Vaiśravaṇa），第二層には執金剛（Vajradhara），第三層には祖師ツォンカパを配し，共にアタカーヴァティー（Aṭakāvaṭī）宮殿に住むものとして執金剛と同一の働きをなす密教尊としての役割を担わしていることが知られるのである。

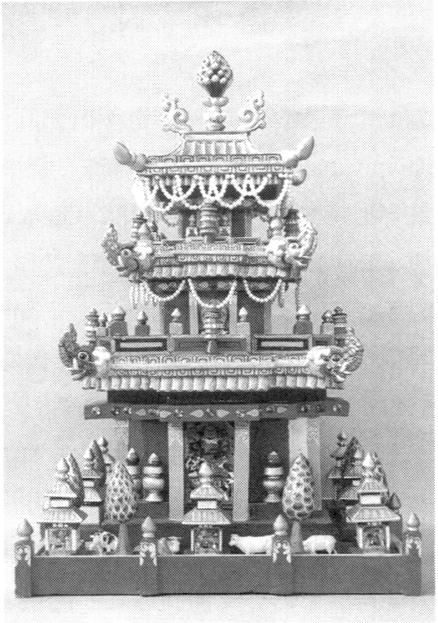

図 1　サムテン・テンジン師とその弟子によって制作された毘沙門天立体曼荼羅

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

図2　勝舞毘沙門（妙舞多聞子）

図3　白勝牛王毘沙門（世雄多聞天王）

図4　黄自在毘沙門（持金剛鍵黄色）

図5　青黒兇悪毘沙門（威猛多聞天）及び八龍眷属

ところでプトンの『毘沙門天画法』(Toh.no.5165)[4]には，十六臂の勝舞毘沙門（Nartakavara-vaiśravaṇa　図2），如意宝珠を持つ白勝牛王毘沙門（Sita-jinārṣabha-vaiśravaṇa　図3），棍棒と黄鼠を把持する黄自在毘沙門（Gadā-dharaśyāmapīta-vaiśravaṇa　図4），大宝杖などを持つ赤毘沙門（Rakta-vaiśravaṇa），塔などを持つ青黒凶悪毘沙門（〔Nāgaparivāra〕Raudra-〔nīlakṛṣṇa〕-vaiśravaṇa 図5），シトロンと黄鼠を持つ黄ジャンバラ（Pīta-jambhala　図6），黒ジャンバラ（Kṛṣṇa-jambhala 図7）などの密教色を漂わす尊像を挙げており，それは密教思想に基づく諸仏功徳の権現者としてのイメージが強いものである。

また，彼の著作である『毘沙門天礼讃文』(Toh.no.5166) には，「金剛乗門にて灌頂され，諸部のタントラ蔵を保持する者であり，金剛手として最勝明（Vidyottama）曼荼羅において灌頂されて護法尊として任命され，他化自在天宮で財宝が与えられし汝に礼拝し，..... 時輪（Kālacakra）大曼荼羅において灌頂され，護法としての命を受け，無二タントラ部を護る者に礼讃し奉る」[5]云々の礼讃文を記しており，明らかに密教，更には無上瑜伽タントラの特命を担う尊にしようとする意図が窺えるのである。

一方，辯才天女は白と赤の両方を伝えており，特に後者の金剛辯才天女（Vajrasarasvatī　図8）

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

図6　黄ジャムバラ（黄財神）

図7　黒ジャムバラ（黒財神）

の場合の成就法においては，行者自らが金剛愛（Vajra rāga）として生起して，赤（貪染）清浄の辯才天女と成って衆生に悉地を成ずる者になることを目的としている。すなわち，この女尊の全身が赤（rakta）であることによって，むしろ衆生済度の故に悪（世俗）に深く染まり行くという大貪染性（悲念）を象徴としており，この女尊の金剛（vajra）とは，空智の不染・不壊・不生の意味であり，辯才天女（Sarasvatī）とは，善逝の立場で世俗に悲を以て染まり行く愛（rāga）の実践者の意味である。つまりこの女尊には愛に徹する美麗にして魅力ある容姿であることが要求される訳であるが，主としてチベットが受容した無上瑜伽タントラ思想の秘密義を，この女尊を多面多臂化することでその全てを表現するという方途を見いだしたのである。すなわち，この女尊の三面は三解脱（空・無相・無願）と赤（貪）・青（瞋）・白（癡）清浄を，六臂の蓮華は不染，剣は断無明，剪刀は断分別，髑髏は無我，宝は断貧苦，輪は断輪廻を，二足は二諦〔に依止する〕のそれぞれを標幟しており，これは密教思想の表現に伴う儀軌次第の無上瑜伽的傾向の一例である。

図8　金剛辯才天女

5　修法儀式の調査研究と今後の課題

前述のごとく，主としてチベットの寺院に伝承された儀軌に基づいた諸種の修法を体験し，また調査を行ってきたが，ここで筆者なりのそれらいついての想いを述べておきたい。

まずこの種の研究は単なる机上で行うものではなく，それは自らの体験を以てする他なく，特に厳しい環境での実施には体力の有無も問われ，曾ての求道者の精神に近いものを持つ必要があることである。

また修法については，学術的なものよりもむしろ信仰心，及び過去の修法経験の有無の方が優

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

先される。その理由は実際に行われる関心度にも繋がり，またそれが灌頂であれ，許可であれ，それらは結縁のみに終わるおのではなく，伝法としての伝授であり，口訣であるからなのである。それ故に敬虔な気持ちで臨むことはむろんのこと，また深くその修法奥義を知ろうとすればその儀軌次第に記されている金剛阿闍梨と金剛弟子の所作にも通じなければならないのである。しかしその所作と言っても一般儀軌に記されているものにとどまらず，当のチベット僧にあっては常識的なものであっても，吾々日本人には実は難儀なものが多いのである。例えばゲルク派であれば祖師ツォンカパの主著に通暁しておく必要があるということである。その事はまた自国の日本密教にも通じていなければならないと言うことでもある。すなわちそれが優劣を計る尺度となるからである。しかし，もしこの尺度を欠くときは，いくら優秀であり素晴らしいと言っても，それは単なるチベットかぶれに過ぎず，尚またそのような面倒な事はさて措いて，勢い真新しいものに取り掛かっても，その結果たるや不確かな見聞録に終わることは自明のことである。

ともあれ可能な限りの必要条件を満たしてこの種の調査を実行する場合，何よりも大切なことは以下の四つである。

1）資料収集の在り方
2）実修の必要と資格
3）灌頂許可への認識と心得
4）伝授と以後の活動

この中でも研究者にとっては資料収集が何よりも優先されなければならないが，各派にとっても秘伝であり，奥義を記す儀軌次第を（しかし最近この種のものが全集として収録される傾向があるとは言え）容易に譲与賜ることや借用は得難く，その入手には相互の信頼度など，幾つかの条件を満たす必要があり，また永い時間を覚悟しなければならないであろう。

また調査内容が修法の場合，単に傍観者であることは許されず，自らも実修に加わらなければならないのである。しかしそれには器・非器，及び資格をも問われることであり，特に灌頂及び許可を調査することは自らが伝授され，また許可を賜ることであるが故に，確固たる認識と心得が必要であると言うことである。更に言えば，伝授と共に以後の宗教活動の義務をも想定されており，単に資料研究で終わるものでもないのである。なおまた，この種の研究には少なくとも 10 年を賭けて，しかも真摯な求道精神を以て臨む必要があるということである。最後にこれらの儀軌次第の終わりには導師への謝礼の事が明記されていることも付け加えておこう。

おわりに

チベットにおける天部の中，今回は毘沙門と辯才の二天につき，各派それぞれが独自の修法儀軌を擁していることを述べたが，およそ天部の諸天に限らず自己の本尊（Sva-adhidevatā）を礼拝讃嘆し，勧請し，供応し，降臨を仰ぎ，願いを託し，再来を祈願し，撥遣することは，瑜伽行者の最も基本となる実践次第であるが，それらは若干，未完成にして未整理のままでインドよりチベットに伝承されたものが殆どであるが，その後それらのものを，プトンを初め多くの高僧たち

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

の努力によって実際に機能する儀軌作法へと仕上げて行った跡が明らかに窺われ，その儀軌化，及び更に発展させて行った功績は大きいと言える。

天部については，今回紹介した二天以外にも日本で馴染みの大黒天(Mahākāla)，聖天(Gaṇapati)などの諸天に関するものもチベットにおいては立派な儀軌を完成しており，これらも含めて学ぶところ多く，将来の研究対象とすべき興味ある分野と考えられる。それはまたチベット人の信仰形態，及び精神文化を正しく知る上で大切な作業と考えるからである。

尚また私の僅か30年の調査の間にも，ギュメ全集の編纂に尽力されたロサン・ゲレ師，立体曼荼羅の第一人者，ギュトウ・タザンのサムテン・テンジン師など，曾てのラサの気風を持った高僧方が次々と故人になられた現況にあって，そうした正統派の修法を記録に残しておくことは，日本のみならず当のチベット人にとっても大切なことであると考えるのである。

ともあれこれらの儀軌の研究は，一種の宗教的経験学と経典儀軌の裏付けを必要とするということである。

略号表

『初会金剛頂経』
仏説一切如来真実摂大乗現證三昧大教王経
Sarvatathāgatatattvasaṃgraha-nāma-mahāyānasūra. Toh.no.479. nya, Ota.no.112. nya, 大正. no.882, 885

『蔵漢大辞典』
北京民族出版社，1993年第1刷

大正
『大正新脩大蔵経』大蔵出版株式会社，1928年（初版）

『大日経』
大毘盧遮那現等覚神変加持経
Mahāvairocanābhisaṃbodhivikurvitādhiṣṭhānavaipulyasūtreindrarāja-nāma-dharmaparyāya. Toh.no.494.tha, Ota.no.126.tha,T.no.848

堀内本 Skt §
堀内寛仁『梵蔵漢対照・初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇』上・下，密教文化研究所，1983，1974年。

Ota.
大谷大学図書館蔵『影印北京版西蔵大蔵経』。

Toh.
『台北版西蔵大蔵経』番号は東北大学西蔵経目録に従った。

文献表

インド・チベット研究会
1987　『チベット密教の研究』，永田文昌堂。

北村　太道
1999　「チベット所伝毘沙門天の研究（1）」『種智院大学密教資料研究所紀要』第2号，pp.1–78。
2000a　「チベット所伝毘沙門天の研究（2）—ゲルク派の毘沙門天の許可—」『種智院大学密教資料研究所紀要』第3号，pp.1–38。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

2000b 「チベット所伝毘沙門天の研究（3）—カギュ・ニンマ併修の毘沙門の許可—」『種智院大学密教資料研究所紀要』第3号，pp.39–58。
2001a 「チベット所伝毘沙門天の研究（4）—毘沙門天など三財宝神の護摩—」『種智院大学密教資料研究所紀要』第4号，pp.1–17。
2001b 「チベット所伝毘沙門天の研究（5）—プトン著作の毘沙門天儀軌—」『種智院大学密教資料研究所紀要』第4号，pp.19–41。
2002 「チベット所伝毘沙門天の研究（6）—プトン著作の『毘沙門天礼讃文』—」『種智院大学密教資料研究所紀要』第5号，pp.1–32。
2005a 「チベット所伝毘沙門天の研究（7）—ボトン著作の『毘沙門天王の現観増益』—」『種智院大学密教資料研究所紀要』第6・7号，pp.1–40。
2005b 「毘沙門天儀軌の研究（1）—チベット資料による—」『善通寺教学振興会紀要』第11号，pp.45–47。
2006 「チベット所伝毘沙門天の研究（8）—チェキー・タクパ著作『黄毘沙門天息災安楽行を成就して供養する作業次第』—」『種智院大学密教資料研究所紀要』第8号，pp.1–19。
2008 「毘沙門天儀軌の研究（2）—チベット資料による—」『種智院大学密教資料研究所紀要』第10号，pp.3–13。
2010a 「密教における天部—チベット資料による—」『サラスヴァティー』創刊号，辯天宗教理研究室，pp.35–59。
2010b 「辯才天儀軌の研究（1）—チベット資料による—」『サラスヴァティー』創刊号，辯天宗教理研究室，pp.61–69。
2011a 「辯才天儀軌の研究（2）—チベット資料による—」『サラスヴァティー』第2号，辯天宗教理研究室，pp.45–53。
2011b 「チベット所伝辯才天女の研究（1）—ゲルク派における辯才天女成就法，併に許可—」『サラスヴァティー』第2号，辯天宗教理研究室，pp.29–44。

清風学園
1985 「第1回・チベット密教学問寺・ギュメ調査報告書」『清風学園紀要』『清風紀要』創刊号。

注

(1) 詳細は北村（2010）pp.35–59。
(2) 第1回ラダック調査団報告書1978年，第2回ラダック調査団報告書1979年，第3回ラダック調査報告書1980年，これらはインド・チベット研究会（1987）にまとめられている。
(3) 『蔵漢大辞典』pp.1566–67。
(4) 北村（2001b）pp.38–40参照。
(5) 北村（2002）pp.18–20参照。

※ 図2～8はLOKESH CHANDRA『TIBETAN-SANSKRIT DICTIONARY』より転載。

NII-Electronic Library Service